

昔、唐土に大なる山ありけり。その山のいただきに、大きな卒都婆二つ立てりけり。

その山のふもとの里に、年八十ばかりなる女の住みけるが、日に一度、その山の峰にある卒都婆をかならず見けり。たかく大きな山なれば、ふもとより峰へ登るほど、さがしくはげしく道遠かりけるを、雨ふり雪ふり、風吹きいかづち鳴り、しみ氷たるにも、また暑く苦しき夏も、一日も欠かず、かならずのぼりて、この卒都婆を見けり。

かくするを人え知らざりけるに、わかき男ども、童部の、夏暑かりける頃、峰に登りて、卒都婆の許に居つつ涼みけるに、この女、汗をのごひて、腰二重なる者の杖にすがりて、卒都婆のもとにきて、卒都婆をめぐりければ、拝み奉るかと思れば、卒都婆をうちめぐりては、すはなち帰り帰ること一度にもあらず、あまたたびこの涼む男どもに見えにけり。

「この女は、何の心ありて、かくは苦しきにするにか」とあやしがりて、「今日見れば、このこと間はん」と言ひ合せけるほどに、常のことなれば、この女這ふ這ふ登りけり。男ども、女にいふやう、「わ女は、何の心によりて、我らが涼みに来るだに、暑く苦しく大事なる道を、涼まんと思ふによりて登り来るだにこそあれ、涼むこともなし、別にすることもなくて、卒都婆を見めぐるを事にして、日々に登り降ること、あやしき女のしわざなれ。この故しらせ給へ」と言ひければ、この女、「若き主たちは、げにあやしと思ひ給ふらん。かくまうできて、この卒都婆みることは、このごろのことにも侍らず。物の心知りはじめてよりのち、この七十餘年、日ごとにかく登りして、卒都婆を見奉るなり」と言へば、「そのことの、あやしく侍るなり。その故を宣へ」と問へば、「おのが親は、百二十にしてなん失せ侍りにし。祖父は百三十ばかりにてぞ失せ給へりし。それにまた父祖父などは二百餘年まで生きて侍りける。』その人々の言ひ置かれたりける』とて、『この卒都婆に血のつかん折になん、この山は崩れて、深き海となるべき』となん、父の申し置かれしかば、ふもとに侍る身なれば、山崩れなば、うちおほはれて死にもぞすると思へば、もし血つかば逃げてのかんとて、かく日ごとに見るなり」と言へば、この聞く男ども、をこがりあざりけて、「恐ろしきことかな。崩れん時は告げ給へ」など笑ひけるをも、我をあざけりていふとも心得ずして、『さらなり。いかでかは我ひとり逃げんと思ひて告げ申さざるべき』と言ひて、帰りくだりにけり。

この男ども、「この女は今日はよも来じ。明日また来てみんな、おどして走らせて、笑はん」と言ひあはせて、血をあやして、卒都婆によくぬりつけて、この男ども帰りおりて、里の者どもに、「この麓なる女の日ごとくに峰にのぼりて卒都婆みるを、あやしさに問へば、しかじかなんいへば、明日おどして走らせんとて、卒都婆に血を塗りつるなり。さぞ崩るらんものや」などと言ひ笑ふを、里の者ども聞き伝へて、をこなる事のためしに引き、笑ひけり。

かくて、またの日、女登りて見るに、卒都婆に血のおほらかに付きたりければ、女、うち見るままに、色をたがへて、倒れまろび走り帰りて叫びいふやう、「この里の人々、とく逃げのきて、命生きよ。この山はただいま崩れて、深き海となりなんとす」とあまねく告げまはして、家に行きて子孫どもに家の具足ども負ほせ持たせて、おのれも持ちて、手まどひして里移りしぬ。

これを見て、血つけし男ども、手を打ちて笑ひなどするほどに、そのことともなく、さざめきののしりあひたり。風の吹きくるか、いかづちの鳴るかと思ひあやしむほどに、空もつつやみになりて、あさましく恐ろしげにて、この山ゆるぎたちにつけり。「こはいかに、こはいかに」とののしりあひたるほどに、ただ崩れに崩れもてゆけば、「女はまことしけるものを」など言ひて逃げ、逃げ得たる者もあれども、親のゆくへもしらず、子をも失ひ、家の物の具も知らずなどして、をめき叫びあひたり。この女ひとりぞ、子孫も引き具して、家の物の具一つも失はずして、かねて逃げのきて、しづかにゐたりける。かくてこの山みな崩れて深き海となりければ、これをあざけり笑ひしものどもは、みな死にけり。あさましきことなりかし。